

臨床現場の経験を新薬開発に生かしたい。ある医師はこう宣言して外資系製薬企業に転職した。臨床経験を積んだ医師は、患者が待ち望む新薬のニーズを最もよく知る存在。そんな彼らがいま、医薬品の安全性情報、新薬開発にともなう臨床試験計画やマーケティング戦略の立案など、製薬企業にとって力ギとなるポジションで活躍し始めている。

重要性増す 製薬医学

に新薬を生み出せる環境ではなくなってきた。この背景には臨床試験の複雑化と、患者や医療現場が求める新薬に対するニーズの変遷がある。

90年代後半に臨床試験の手順が世界的に統一された。新薬開発の成功率

が満たされていない分野に移るとともに開発難易度がアップ。さらに、手元の新薬を延命しようとする医師が求められ、PM Sを大規模に実施し、有用性を高めるライフサイ

クルマネジメント(LCM)の重要性が増した。こうした状況下で製薬

〈上〉

治験の複雑化と患者ニーズの変遷

を高めるためには精密に臨床試験計画を設計する必要があるので、試験を実施する医療機関や行政との協議・調整といったインフラ整備が煩雑にな

った。

また新薬ターゲットは「感染症」「高血圧症」などから「がん」「認知症」「遺伝病」など医療ニ

ズが呼ぶ考え方が広まってきた。「現場はこんな新薬を求めている」「臨床試験はこう組めば成功す

る」「日常診療を想定して

る医師が増えている。そうした医師らで組織された日本製薬医学会(JAPhMed)の調べでは、製薬企業勤務の医師は今年1月時点で約160人と9年前に比べ3倍程度増えた。その大半が外資系に勤める。また調査会社PRITMのア

「感染症」「高血圧症」などから「がん」「認知症」「遺伝病」など医療ニ

ズが呼ぶ考え方が広まってきた。「現場はこんな新薬を求めている」「臨床試験はこう組めば成功す

る」「日常診療を想定して

る医師が増えている。そうした医師らで組織された日本製薬医学会(JAPhMed)の調べでは、製薬企業勤務の医師は今年1月時点で約160人と9年前に比べ3倍程度増えた。その大半が外資系に勤める。また調査会社PRITMのア

る医師が増えている。そうした医師らで組織された日本製薬医学会(JAPhMed)の調べでは、製薬企業勤務の医師は今年1月時点で約160人と9年前に比べ3倍程度増えた。その大半が外資系に勤める。また調査会社PRITMのア

る医師が増えている。そうした医師らで組織された日本製薬医学会(JAPhMed)の調べでは、製薬企業勤務の医師は今年1月時点で約160人と9年前に比べ3倍程度増えた。その大半が外資系に勤める。また調査会社PRITMのア

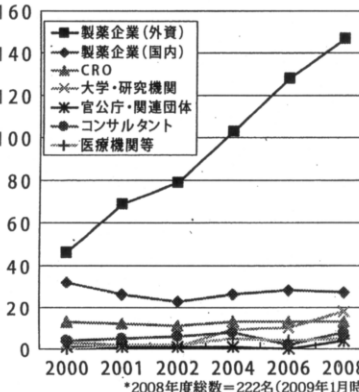
医師目線で開発・営業

MA部門設置など外資先行

査員が約1割を占めるようになった。また海外提携先のリーダーには医師が就く。医学背景を想定しながら協議することが求められる。医師というバックグラウンドをもつ企業担当者こそでない担当者では発言の重みが違ふ(今村理事長)。

製薬企業は医師をお客様ととらえがちだが、薬の恩恵を受けるのは患者だ。処方する医師目線での新薬開発やマーケティング戦略を立案し、対等な立場で処方提案するステップへ進化しなければならぬ。すべてを医師にするのではなく、社内のキーマンに医師が必要になっている。次回は今村理事長に製薬企業での医師の役割・課題を語ってもらう。(三枝寿一)

〔日本製薬医学会会員数の推移〕



*2008年度総数=222名(2009年1月時点)